フィリピン・マニラ あちこち探索　　（はじめてのフィリピン：携帯SIM）

はじめてのフィリピン

今年最初の「あちこち探索」はフィリピンです。フィリピンと云えばドゥテルテ大統領。麻薬組織壊滅作戦では、「麻薬犯罪者は射殺する。」と発言するなど、フィリピンの麻薬シンジケートはビクビクしているという噂です。

話はそれましたが、フィリピンに行ってやりたいことは幾つかあって、その一つが携帯電話のプリペードSIMを使ってみることです。携帯電話の機種を変更したのは２年前。粋（いき）がって、その当時に出始めたSIMフリー端末を購入してはみたものの、結局、大手通信事業者の呪縛（じゅばく）から逃れることができず、何のためのSIMフリー端末なのか分からない状態が続いていました。

そんな思いを胸いっぱい吸い込んで出掛けたのは、寒さで凍（こご）える２０１８年２月１日。飛行機は、予定時刻どおりに羽田を飛び立ちました。やはり羽田発の海外旅行は便利です。チェックインの締め切りが４０分前なので、１時間ちょっと前を空港到着の目安にしても十分に余裕です。

行先はフィリピン・マニラ、ちょうど５時間のフライトでニノイ・アキノ国際空港に到着しました。この空港の評判は最悪で、無秩序に作られた４つのターミナルの移動には、一旦、空港敷地外に出ないと行けないという徹底した無計画ぶりです。　何はともあれ、第一の目的であった携帯電話のプリペイドSIMを手に入れようと思います。実を云うと、フィリピンの携帯電話会社であるSMARTには無料の観光用SIMが用意されていて、ちゃっかり出発前に申込んで置きました。（同じようなのはglobeにもあります。）

到着出口を出たら、早速Smartカウンターに直行します。しかしながら、「Free SIMをください。」と英語で云うも全く通じません。「どれがいい？」みたいなことも言ってます。「なんでそうなるの？」などと思う気持ちもありますが、これ以上英語で深く質問できる語学力もなく、すんなり引き下がる以外にありません。

それでも頭の中では引きずっていて、「Free SIMって無料SIMのことではなかったのか？」とか、「じゃあ！SIM Freeってなんだっけ？」、「看板には１GB Freeって書いてあるけど、それって何がFreeなの？」などと益々混乱が広がります。

Prepaid SIMカウンター

欲しかった携帯のSIMですが、結局は現地の友達から無料（ただ）で貰うことになりました。SIM自身はそんなに高いものではなく、40ペソ(約80円）で買えるようでした。

それから先の設定は全くの友達任せだったのですが、よくよく聞いて見れば、３０日間有効の1.5Gプラン（GOSURF299）に申込んでくれました。その料金は299ペソ（約600円）。これはインターネットやSMSへのデータ接続料金だけで、電話については使った分だけその都度（つど）引かれるシステム(１分あたり7.5ペソ)らしいです。

フィリピン・マニラ あちこち探索　　（はじめてのフィリピン：LRTに乗ってみる）

MRT３号線:ショウ・ブルバード（Shaw Boulevard）駅

マニラに来てやりたいことの二つ目は、市内を走る電車（LRT）に乗ることです。何でこんな処（ところ）まできて電車に乗りたいのか自分でも分かりません。ところで、LRTとは、Light rail transitの略号で、「軽量軌道交通」あるいは「次世代型路面電車」と訳されます。しかしながら相当古い電車であるため、お世辞にも「次世代型路面電車」とは呼べません。

ＬＲＴは２路線あって、ＭＲＴと呼ばれる路線も１路線走っています。ＭＲＴとは、Metro Rail Transitの略号らしいのですが、見掛けはＬＲＴと同じです。しかも２番目に作られた古い路線であるにも拘わらず、３号線と名乗っているあたりは七不思議です。マニラ全体の路線計画段階で３号線となっていたのかもしれません。

ＭＲＴ３号線については、良くない噂が目立ちます。２０１８年１月のマニラ新聞では、「車両・線路・信号・エスカレーターに至るまで故障だらけ、車両を中国から38億ペソで48台購入したが欠陥だらけで倉庫入り、汚職まみれでその荒廃ぶりは世界最悪」と酷評しています。

ホテルの最寄駅は、まさにこのMRT３号線、ショウ・ブルバード（Shaw Boulevard）駅でした。ここで100ペソを支払いBeep cardを購入します。これはフィリピン版SUICAであって、２０ペソがカード代、８０ペソがチャージ金額という内訳でした。運賃は２０ペソ程度、2018/07/15時点の為替レートが２.１円/PHPでしたから、４２円に相当します。京葉高速の北習志野から西船橋までが４４０円（８．１ｋm/３駅/１０分）ですから、国が６割から７割を補助しているにしても相当安い料金設定です。

Beep cardを手にしたら改札をサッと通れると思ったら、その前に立ちふさがるのはガードマンの検問です。この国では、電車に乗る時もモールに入る時も、もちろんホテルに入る時も、どこに行ってもボディーチェックが待ってます。さらに、改札のゲートは遊園地の入り口にあるようなバー式で、これではいくらBeep Cardの性能が良くても人の流れが詰まってしまいます。あらためて駅の中を見渡して見れば、すべての時計は故障中、エスカレータはただの階段と化していてマニラ新聞の記事の内容は本当でした。

やっとのことでプラットフォームに辿（たど）り着きました。照明が点いているのに大変暗く感じます。少し待つと電車がやってきました。車内は結構込み合っています。ここはスリが多いとのことで、リュックを前に抱えている人が目立ちます。海外の慣れない土地にくると、周りが全員怪（あや）しく見えるものですが、我々も怪しく見られているに違いありません。

Shaw Boulevard駅（MRT３号線）

Taft Avenue駅（MRT３号線）/EDSA駅（LRT１号線）

フィリピン・マニラ あちこち探索　　（はじめてのフィリピン：PNRに乗ってみる）

フィリピン国鉄　エドゥサ（EDSA）駅

マニラに来て、次はPNRへの乗車を試みます。PNRとは「Philippine National Railways」、すなわちフィリピンの国鉄です。日本からの車両の提供もあって、旧国鉄時代の客車が現役で走っているという、鉄道マニアにとってはヨダレの出るような路線です。しかしながら、かく云う私は「鉄ちゃん」ではありません。「鉄ちゃん」（あるいは「鉄オタ」）にもいろいろあるようで、「乗り鉄」や「撮り鉄」の中でも細かくが趣味が分かかれているようです。

「撮り鉄」を職業にしたのが中井精也で代表される鉄道写真家です。しかしながら、プロとアマチュアには大きな違いがあって、偶然に支配されるのがアマチュアで、意図をもって狙って撮るのがプロの仕事だろうと思います。

乗車するのはEDSA（エドゥサ）駅。橋の上から線路を覗いていると、遠くに列車の明かりが見えます。しかしながら、焦る必要はありません。列車には、そこからゆっくり歩いても間に合います。駅の窓口で切符をかって、ホームで列車の到着を待ちます。明かりは見えるのに、なかなか来ません。・・・

ようやく列車がやってきました。犯人の護送列車のように、全ての窓は金網で防護されています。各車両に係員が乗車していて、安全を確認しています。ここでいう安全確認とは、テロや暴徒のいないことの確認なのかもしれません。　しずかにドアがしまり出発します。　まるで自分が護送犯人であるかのように錯覚します。

目指す先はトゥトゥバン（TUTUBAN）、そこはPNRの終点で国鉄本社もそこにあります。およそ１４ kmの道のりが僅か１２ペソ（２５円）でありました。途中の車窓から見えるのは線路の敷地に不法に住み着いた人たちで、異様な景色が続きます。そこで飼われている鶏も、やけに姿勢が良く、一羽一羽異なるゲージに大事に入れられていて、卵を産ませるためのものではなさそうです。

日を改めて、EDSAからアラバン方向にも行ってみます。特に用事もなかったのですが、Bictan駅で途中下車してみます。ここは活気のある駅で、駅付近には多くの人が往来（おおらい）しています。ここはいつか夢でみたところです。横にある歩道橋にも見覚えがあり、これこそまさしくデジャブーか・・　と思いきや、YouTubeでみたことのある場所でした。

ここから少し先のアラバン(Alabang)までは、１時間に２本程度の頻度で列車が運行されています。しかしながら、その先はなんと一日１往復で、朝行ったきり夕方まで列車は帰ってきません。そうなると線路は沿線住民の生活の場と代わり、人や荷物を運ぶ私設トロッコ台車が走り始めます。

フィリピン国鉄 Bictan駅付近

Los Baños 国際稲研究所(IRRI)付近

フィリピン・マニラ あちこち探索　（はじめてのフィリピン：バスに乗ってみる）

EDSA（エドゥサ）通りのバス乗り場

マニラでは、バスに乗るのも結構ハードルの高い事柄です。ホテル近くのEDSA（エドゥサ）通りには、大型バスが数珠をなして通って行きます。バスの助手が、小さなカードを持って声を掛けているのですが、長い時間観察していても仕組みがさっぱり分かりません。行先すら全く判断できません。来るバス来るバス、会社も色も違うので、最初は貸し切りの観光バスだと思ってました。

しかも、乗るためにはちょっとした運動神経も必要です。走っているバスに飛び乗る姿は当たり前。しかも、絶妙なタイミングでドアが開閉します。道路が混雑している時には、バスのいる中央のレーンまで手前の車を掻き分けながら走って行く事も茶飯事です。流石に我々には到底無理で、初心者は始発のバスターミナルか大きなバス停から乗車した方が無難です。

長距離バスの場合には、各会社の営業所からバスが出ます。営業所といっても実態は単なる駐車場で、各社とも場所も規模もバラバラです。営業所の多く集まっているエリアは、LRT1:ヒル・プヤット(Gil Puyat)駅近く、MRT3:クバオ(Cubao)駅近く、そしてMRT3:タフトアベニュー(Taft Avenue)駅近くです。　まずは、タフトアベニュー駅近くの通称「パサイ（pasay）バスターミナル」と呼ばれているエリアを調査してみます。

バスターミナルといっても、共同利用の大きな乗降施設がある訳ではなく、中小の多くの営業所（＝駐車場）がひしめき合っているに過ぎません。よくよく考えれば新宿でも、バスタ新宿が出来る前までは路上のあちらこちらで客の乗降を行ってましたから驚くことではありません。

Pasayに営業所を置く大手と云えばVictory LinerやDLTB Co.、主としてVictory Linerはマニラ以北、DLTB Co.は南を事業ドメインに据（す）えているようです。

しかしながら、本当に恐るべしは中小規模のバス会社であって、マニラに最も近い穴場リゾートであるミンドロ(Mindoro)島のプエルトガレラ（Puerto Galera:マニラから約130Km）や飛行機でしか行けないと思っていたパナイ(Panay)島のイロイロ(Iloilo:マニラから約500Km)へも行けるようでした。

さらなる強者はフィリピン南端のミンダナオ島ダバオ(Davao)まで行く超長距離バスで、２つの海峡を船で渡り、約1,000kmの道のりを４８時間かけて毎日走っているらしいです。しかも、エアコンの効かない格安バスも運行しているようで、フィリピンのバスの多様性は侮（あなど）れません。（Philtranco,PP Bus line,Ceres Liner,DIMPLE STAR,etc.）

Philtrancoバスターミナル

DLTB Co.バスターミナル

フィリピン・マニラ あちこち探索　（はじめてのフィリピン：ジープニー）

庶民の大切な足「ジープニー」

　ジープニーは難関です。第一にどれに乗ったらよいのか分かりません。地元の人を観察すれば、信号待ちしているジープニーに駆け寄って乗り込んでいます。中にはうさん臭そうな兄さん達が背を屈めてぎゅうぎゅう詰めに乗っているし、いま一歩が踏み出せません。ジープニーの行先も、車のボディーに何やらペンキで書かれているものの、それがどこなのか皆目（かいもく）見当がつきません。

　ところで、この「皆目」という言葉ですが、変な字だなぁと思って用例を調べてみれば、「～見当がつかない」とか「～分からない」など否定の文しか続きません。同じように、ネガティブな意味でしか使われないのが「全然」です。ところが最近は、「全然ＯＫ」といったポジティブな使われ方も広まってきて、「全然いい」は正しい表見であると主張する言語学者も現れてきました。

　同様に、「的を射（い）る」に対して誤用とされていた「的を得（え）る」も反撃に出ています。この論争は「NHKプロフェッショナル仕事の流儀」にも大々的に取り上げられて、困ってしまうのは大学受験問題を作成する先生たち。もはや、この問題を試験に出す訳にはいかないだろうと思います。

　話がだいぶ横道に逸（そ）れてしまいましたが、フィリピンの街中には「半端ない」数のジープニーが走っています。マニラ首都圏だけでも４万８千台（三菱 UFJ 証券調べ）が走行しているという事で、東京都区内を走るタクシー４万５千台（東京ハイヤー・タクシー協会調べ）とほぼ同数です。古いディーゼルエンジンから吐き出される排気ガスは大気汚染の主因ともなっていて、電動ジープニー試運転のニュースを見たのが2007年7月でしたが、あれから１１年経っても状況はいっこうに改善していません。とはいっても一つの文化、腹を据（す）えて乗ってみようと思います。

アラヤ・トライアングル公園

　向こうからやってきたのは行先にパサイ（Pasay）と書かれた派手な色のジープニー。Pasayと云われても範囲は広く、新宿区とほぼ同じ面積で、Pasayのどこに行くのか分かりません。しかしながら、まずは車に乗ってみます。おそらくジープニーの行き先には、方面だけ分かれば地元住民だけが知っている暗黙の行き先があるのだろうと思います。

　手に握しめているのは２０ペソ紙幣、後ろの座席からお客伝いにお金を渡すとおつりもお客伝いに戻ってくるらしいです。行先はいまいちよくわかっていませが、こんな時、頼りになるのはスマートフォン。Googleマップを開きさえすれば、どこに連れていかれようとも迷うことはありません。

　スマートフォンを覗いてみれば、ジープニーはマカティ(Makati)市内を走っています。ここはアラヤ財閥が開発を手掛けたフィリピン屈指の高級ビジネス街。この一角にあるアラヤ・トライアングル公園の中に、お気に入りのフローズンヨーグルトのお店があって、せっかくなので寄ってみようと思います。ジープニーの手軽さは、好きなところで自由に降りられること。信号で停車しているすきに、素早く下車することができました。

　お店の名前は「pinkberry」、ハリウッドセレブにも人気と噂のカリフォルニア発祥のお店のようです。店構えや内装はいたってシンプルかつカジュアル風でありながら、値段はレギュラーサイズが235ペソと超高級価格。コンビニで500mlのコカ・コーラが37ペソ、スターバックスのトールサイズのカフェ・ラテでも135ペソぐらいですから、フィリピンの生活水準を無視した相当強気な価格設定に思えます。